

まうあそ  
まよせい

Vol.17

rcrc.ryukoku.ac.jp

〔発行日〕  
2024年9月6日〔編集・発行〕  
龍谷大学 矯正・保護総合センター

## 2023-2024年の活動を振り返って

龍谷大学  
矯正・保護総合センター長 浜井 浩一

矯正・保護総合センター長となって6年目を迎えました。慣例に従い2023年を振り返りつつ、この1年間のセンターの活動についてご報告させていただきます。

当センターは、矯正や更生保護に関する教育実践としての矯正・保護課程と研究としての矯正・保護研究センターを統合し、新たに社会貢献活動を付け加えて2010年に開設されました。

2023年度の教育活動としては、新型コロナウイルス感染症の5類への移行を受けて、矯正・保護課程の講義もコロナ禍以前の対面授業に戻り、2023年度の延べ受講者数は前年度より832名多い、3,240名となり過去最高の受講者数となりました。また、コロナ禍でのオンライン授業の経験を生かして、2023年度から矯正・保護課程の科目の一部を社会人向けにオンライン（オンデマンド）で提供することで、受講生の都合に合わせて受講できるようにするなど新たな教育実践を行った結果、社会人受講者数が前年度より99名多い113名となりこちらも過去最高を記録しました。

研究活動については、2021年度から新規・大型事業として3年計画で始まり、丸善雄松堂株式会社との業務委託契約によって進められていた團藤文庫資料整理事業が最終年度を迎えました。この團藤文庫プロジェクトについては、NHKとの共同研究の成果の一端が、NHK・ETV特集「誰のための司法か～團藤重光 最高裁・事件ノート～」として2023年4月に放送され大きな反響がありました。これを受けてさらなる整理事業の必要性が認められ、2024年度の新規・大型事業として採択され、さらに3年間の第二次の整理作業が開始されました。

実証研究プロジェクトでは、科学研究費（基盤研究(B)）を獲得したISR（国際自己申告非行調査）の研究結果を、当センターの研究委員長である津島昌弘がヨーロッパ犯罪学会の年次大会において報告するとともに、研究のまとめとして『日本の青少年の行動と意識：国際自己申告非行調査（ISR）の分析結果』（現代人文社）が発刊されました。また、2023年8月には、センター長浜井がNHKとの共同研究として「少年院在院者に対する闇バイト調査」を実施し、その結果がNHK「ニュース7」等で公表されました。さらに、実証研究プロジェクトでは、2024年3月10日にイタリア共和国サレルノ少年裁判所長のPiero Avallone判事を招い

た日伊少年司法シンポジウム「イタリア未成年（少年）裁判所から日本の少年司法について考える」を開催しました。

2022年度から株式会社小学館集英社プロダクションの寄付を受けて始まった矯正・保護歴史研究プロジェクトは、2年間の研究のまとめとして2024年2月3日に「旧奈良監獄に設置が予定されている監獄関係博物館における史料等の活用と地元自治体等との連携」と題したシンポジウムを開催しました。

研究関連としては、センターが特別会員となっている日本犯罪社会学会の第18期会長にセンター長の浜井が就任しました。

センターでは、教育・研究に加えて社会貢献活動を中心に新たな活動にも挑戦しています。ここでは、そのいくつかを紹介したいと思います。

2023年12月9日には、京都駅前の龍谷大学響都ホール校友会館において第13回矯正・保護ネットワーク講演会を開催しました。講演会では、「子どもの声に耳を傾ける～少年非行の現場から～」をテーマに、元福岡県警察少年育成指導官でスクールカウンセラー／スクールソーシャルワーカーの堀井智帆さんにご講演いただきました。周囲の大人がどれだけプラスに関われるか、非行少年に寄り添い続ける堀井さんの姿勢に多くの聴衆が心を打たれました。

また、2023年度も、社会貢献活動の一環として、センター長浜井が、滋賀県社会保障審議会再犯防止推進計画検討専門分科会の座長に就任し、滋賀県第二次再犯防止推進計画のとりまとめに従事するなど、兼任研究員や嘱託研究員が研究成果の社会実装という観点からさまざまな地方自治体における再犯防止の取り組みに協力しました。さらに、当センター研究フェロー福島至龍谷大学名誉教授や客員研究員石塚伸一同名誉教授を中心にセンター研究員が行刑改革や裁判記録の保管等について新聞等に235件以上のコメントを出すなどメディアでの情報発信にも努めています。

2024年度は、次年度に予定されている拘禁刑の施行に向けた準備をはじめ、各地で第二次再犯防止推進計画の策定が始まるなど再犯防止に向けた刑事政策の流れが一層加速されることが見込まれます。矯正・保護総合センターにおきましても、これまでの経験を踏まえ、2024年以降も、教育、研究、社会貢献のさらなる充実に努めていきます。引き続きよろしくお願いたします。

## センター主催 第13回矯正・保護ネットワーク講演会

2023年12月9日に開催しました第13回矯正・保護ネットワーク講演会では、福岡県警察少年育成指導官として21年間勤務し、現在は非行・ひきこもりなど親子支援のスペシャリストとしてフリーで活躍している堀井智帆氏を講師にお迎えし、「子どもの声に耳を傾ける～少年非行の現場から～」と題して、ご講演をいただきました。当日は、約280名の方にご参加いただき、講演会は盛況のうちに終了することができました。

## 「子どもの声に耳を傾ける～少年非行の現場から～」

講演者 **堀井 智帆 氏** スクールカウンセラー／スクールソーシャルワーカー  
(元 福岡県警察少年育成指導官)

開催日時／2023年12月9日(土) 13時30分～15時10分

開催場所／龍谷大学 響都ホール 校友会館

### 開催趣旨

龍谷大学は、100年以上に及ぶ浄土真宗本願寺派の宗教教誨を基盤としながら、1977年に刑事政策に特化した教育プログラムとして、矯正課程（現在の矯正・保護課程）を設置しました。それ以来、刑務官や法務教官、保護観察官などの専門職のほか、保護司や篤志面接委員、BBSなどのボランティアの養成に努めて参りました。

また、2001年には、矯正・保護についての学術研究を推進する矯正・保護研究センターを設置しました。この研究センターは、2002年度からは、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（AFC）に採択され、8年間にわたり研究活動を行ってきました。

2010年には、矯正・保護総合センターを開設し、矯正・保護課程の教育活動と研究センターの研究活動との有機的な統合をはかることとしました。さらに、矯正・保護の分野における社会貢献活動も、事業の柱として明確に加えることとしました。その社会貢献活動の一環として、2011年度から矯正・保護ネットワーク講演会を開催させていただいております。この講演会は、矯正・保護の実務家や関係する行政機関、民間団体、企業家、専門職の方々、地域の方々など、矯正・保護の問題に関心を寄せる多様な人びとに対し、それぞれの思索と相互理解を深めるため、議論・研修の場として提供させていただいております。

今回は、少年非行の根っこに寄り添う少年育成指導官として21年に渡り活躍され、現在、フリーの立場で非行・ひきこもりなど親子支援のスペシャリストとして様々な場所で相談支援業務を行っている堀井智帆氏を講師にお招きし、「子どもの声に耳を傾ける～少年非行の現場から～」をテーマにご講演いただくことになりました。

この講演がお集りいただいた皆様に実り多いものとなりますよう、心から願っております。

### プログラム

- 挨拶・趣旨説明・講演者紹介  
浜井 浩一（龍谷大学矯正・保護総合センター長／同大学法学部教授）
- 講演  
講演者 堀井 智帆氏（スクールカウンセラー／スクールソーシャルワーカー〈元福岡県警察少年育成指導官〉）
- 質疑応答

### 後援

京都府、京都市、浄土真宗本願寺派、京都保護観察所、京都府保護司会連合会、京都府更生保護女性連盟、更生保護法人京都府更生保護協会、京都BBS連盟

# 「子どもの声に耳を傾ける～少年非行の現場から～」

講演者：堀井 智帆氏

## はじめに ～今の仕事に辿り着くまで～

皆さま、こんにちは。いまはさまざまな施設や学校で子どもたちの支援を行っています、福岡から参りました、堀井と申します。

もともと私は、大学で児童福祉・社会福祉を学びました。それまで私は、子どもは家庭で親から愛されて育つのが当たり前だと思っていました。そんな中、大学で児童相談所に実習に行き一時保護されている子どもたちを目の当たりにしたときに、私たちのこんなにも身近なところで、こんなにもたくさん子どもたちが、親から愛されることができずに育っているという現実を知ったときに、なぜそんなことが起こっているのかと、引きずり込まれるようにこの世界に入りました。

大学卒業後は、傷ついた子どもたちを救いたいという熱い思いで、児童相談所のケースワーカーになるのが私の夢でした。ただど当時、児童相談所のケースワーカーは専門職ではありませんでしたので、一般の行政職員として採用されて、異動先の1カ所として児童相談所がある。いつ児童相談所に行けるか分からない、行けたとしていつまでいられるか分からない。

そんな子ども支援にとってはとても不安定な職場で、「あなたは、もし子ども支援とまったく関係のない部署に行っても、そこの仕事をやれるの?」と(大学の)ゼミの先生から言われて、私が役所の窓口で事務仕事をしているのを想像したんですよ。私が県警に入ったときに最初に就いた上司が私につけたキャッチフレーズが、「非行少年には強いです。事務処理能力はゼロです」というのがキャッチフレーズでした。事務処理能力がないことは、もう自他共に認めていましたので、「ああ、駄目だ」と思って、「採用から退職まで子どもの支援に専門で就ける仕事を探さない」と言われました。

私は児童養護施設で2年間働きました。施設には、何かしらの虐待を受けた子どもたちが生活しています。その子どもたちの試し行動や愛情を奪い合うような行動は激しくて、職員は汗水、涙を流しながら子どもたちのために走り回ります。

そんな私たちのもとに子どもたちが駆け寄って言う言葉は、「お母さんはいつ迎えに来るのか」「お父さんから連絡は来たか」「家に帰りたい」。その子たちのケース記録をひろげれば、タバコの火を押し当てられたとか、食事を与えてもらえなかったとか、肋骨を蹴って折られたのに、病院に連れて



いってもらうこともできずに陥没したままだとか、そんなことが数々つづられているにもかかわらず、それでもやっぱり子どもたちは、親を求め、家に帰りたい。そんな子どもたちの姿を見て、私は、この施設に入ってしまった子どもだけではなく、その子たちが住みたい人と住みたい場所で暮らす生活を支援できる仕事はないだろうかと思うようになって、探していたら、なんと警察の中に子どもと家庭を丸ごと支援できる、警察官ではなく少年育成指導官と言って、犯罪の被害や加害に関わった子どもたちを専門で立ち直り支援をする職員がいるということを知って、採用試験を受けて、縁があって入りました。

県警の中で20年、本当に天職だと思って仕事をしていたんですけど、20年ぐらいたったら、そろそろあと何年かで管理職みたいな話が出てきて、もしかしたらまた管理業務に、事務仕事に就かなければならないかもしれないという時期が近づいてきているときに、ずっと迷っていたんですよ。私にその仕事ができるのかな。現場で子どもと関わらないで私は生きていけるのかなと迷っていたときに、ちょうど体を壊して、自分の人生を考える時間ができたんですよ。

そのときに、このまま公務員としてレールに乗って生きていくのか、それとも現場で困った子どもと親の真ん中で、一緒に悩み、考える人生を送るのかというのを考えたときに、やっぱり1回しかない人生だから、やりたいことをやろうと思って、私は現場でずっと子どもと親の真ん中で仕事をする心に決めて、それで「辞める」とか言って大騒ぎして、みんなから全力の引き止めを受けながらも、わがままを言って旅立たせてもらって、いまはいろんな学校や施設などで活動をしています。

## これまで出会ったかけがえのない子どもたち ～警察時代、子どもたちにどのように関わってきたのか～

私が警察でどのような子どもたちとどのように関わってきたのかというのを、先ほども浜井先生から紹介していただきました『プロフェッショナル 仕事の流儀』という(NHKの)番組で密着してもらった映像がありますので、その一部を皆さまにご覧いただきたいと思います。

講演者が出演された上記番組(一部)を約2分30秒上映

(上映後、壇上のスクリーンに番組で成人式のシーンを撮影したときに講演者と子どもたちで撮った集合写真とその子どもたちの中学校卒業式のときの写真計2枚を映す)

ありがとうございます。番組では、警察の判断で全員モザ





イクだったんですけど、本人たちはたいそう出たがってですね、「なんで俺たちだけモザイクなんだ」ってめちゃくちゃ怒られました。

この子たちには成人式のシーンは、ちゃんと私の講演で写真を使っているからって言っています。もちろん全員本人と保護者から了解をもらい、このお気に入りの写真を使わせてもらっています。

この左側の写真と右側の写真は、同じ子どもたちの写真です。左側は、中学校の卒業式での写真（特攻服などを着た子どもたちの集合写真）です。中学校の卒業式が終わって、福岡ではこのような写真を撮ります。京都はどうですか。大阪でその前聞いたら、この文化はないって聞いたんですけど、京都もないですね。ないですかね。福岡は、卒業式が終わった後に、各地区にいま1校でこれだけの子どもたちが集まる学校ってなくなりましたので、その地区の子どもたちが1カ所に集まって、こうやって集合写真を撮ります。同じ子どもたちの5年後の成人式が、この右側の写真になります。

私がこうやって一緒に写真を撮っていると、この周りにはたくさんの警察官たちが、「警戒」という名のもとに取り囲んでいるんですね。私がこうやって一緒に写真を撮っていると、仲の良い警察官たちから「ちょっと堀井さん、堀井さん」と呼ばれて、私が「なになに」と言って行ったら、「ちょっとちょっと、堀井さんの仕事はなんやったっけ」って言われてですね、「立ち直り支援ですけど」って言ったら、「ちょっとちょっと、見て、あれ。全然立ち直ってないやん。なんなん、あんな格好して集まらせてから」みたいなことを言われるわけですね。

別に私が集まらせているわけじゃないけどなど思いながら、私がその人たちにどのような言葉を返すかと言うと、「じゃあ、あなたたちは、この子どもたちがこれまでどのような家庭で、どのような体験をして、どのような傷を負って生きてきたのかということを知っているのか、知ろうと努力をしたことはあるのか。そして何か一つでも、この子どもたちの心の傷を温め得る手だてを取ったのか。そんな手だてを何一つ取ったこともない大人に、この子どもたちを白い目で見る権利はない」と言って、私がぶりぶり怒りはじめるので、同僚たちは「始まった、始

まった。また堀井が始まった」と言いながら、「じゃあ、もう分かったよ。好きにしていいるから、時間になったら解散させてよ」と言って、その後は温かく見守ってもらうんですけども、私だって、関わっている子どもたちがどこにいるかわからないぐらいの制服姿やスーツ姿で現れてくれたら、どんなにうれしかって思っています。

だけど、この子どもたちが、こうやって「俺はここにいるぞ」とたとえたくさんの大人から白い目で見られたとしても、こうやってここに集まらなければならなかったんだとしたら、私のこの子どもたちへの仕事が足りなかったんだと、自分の仕事を省みることはあったとしても、この子どもたちだけを責めるようなことはとてもできないと思っています。大人が眉をひそめて見なくなる子どもたちのその行動の背景に、どんな子どもたちの傷があったのかということに思いをはせることのできる大人の存在が、私は社会には求められていると、そう思っています。

このように私はたくさんの子どもたちとの関わりが、県警に入って始まりました。傷ついた子どもたちを救いたいという熱い思いで私はこの仕事に就きましたが、出会いが始まった子どもたちは、大人のことが大嫌いで、私が「こんにちは」と声をかけても、返ってくる言葉は「うざい」「きもい」、携帯番号を聞いても「国家権力には教えたくない」とか言われるのがオチで、出会いは最悪から始まったんですね。

いくら大人が関わりたいと思っても、子どもたちの方は大人のことが大嫌いで、大人から遠ざかろうとする、そんな子どもたちの姿に私は面食らいました。自分が思い描いていた子どもたちとのすてきなお仕事ライフは、ガラガラと音を立てて崩れました。正直、どうやってやっていったらいいのか、暗中模索でこの仕事が始まりました。

私たちが関わる子どもたちは、家出や薬物、窃盗、暴力、暴走など、さまざまな問題行動を通して出会います。それらの行動を止めるために、一人一人の子どもたちの家庭や生い立ちにまで関わっていく中で私が気づいたことは、たとえどんな服装でどんな態度をとってくる子どもたちでも、大人一人一人がしっかりと向き合って関わっていけば、みんな同じかわいい子どもなんだなということに気がついて、それからは、この子どもたちがかわいくてかわいくて仕方がなくなって、外でブンブンブン、ブンブンブンとバイクの音がしてくると、私のわが子たちが幼いときは、私のところに駆け寄ってきて、こう言いました。「ママ、来たよ。ママの好きなお兄ちゃんたちが来たよ」と言って、どうやら私のわが子たちは、ママはヤンキーが大好きでこの仕事をしていると信じているようですね。まあ、そう思われるぐらいに、関わる一人一人の子どもたちが私にとってかけがえのない存在になったんですね。

## 問題行動の背景とは ～問題行動は子どもが大人に向けて発するメッセージ・SOS～

先ほども言ったように、私が子どもたちと関わるときは、必ず何かしらの問題行動といわれるものを通して出会います。だけど実は、私はこの「問題行動」という言葉があまり好きではありません。彼らが起こす問題行動は、全てが親や周囲の大人に向けて発しているメッセージ、SOSだと、そう思っています。思春期に子どもたちが大人に向けて起こすメッセージ、SOSは、とてもエネルギーが大きく、学校や地域、警察をも巻き込むほどのエネルギーで、子どもたちはその行

動を繰り返します。

だけど子どもたちは、何も思春期になって突然問題行動を通して親にサインを発し始めるわけではないんですね。実は、子どもたちは小さいころから、家や幼稚園・保育園、学校でも、大人や親の困る行動を通してサインを発するということを始めています。

私が警察を辞めるときに、たくさんの仲間たちから「辞めるのをやめろ」って言われました。その理由は、「そんなに

ヤンキー大好きなのに、辞めたら会えなくなるよ」って、「絶対に学校とか言ったら物足りん」って言われたんですよ。

実際、思春期の子たちと主にたくさん関わってきて、もっと早く出会っていたらとか、もっとこの時期にいろいろこの家庭にしてあげられたらという思いが、ずっと20年ぐらい募っていたので、自分の仕事のスケジュールを組むときに、小学校を多めに入れたいと言って、教育委員会などと交渉して、小学校をたくさんメインに入れてもらうようにしたんですよ。実際、小学校で仕事を始めたら、盗みも、暴力も、性加害も、依存も、全部小学校にあったんですよ。なので、結局サポートセンターでずっとやっていたこととまったく同じことを、いま小学校でもやっているんですよ。

となったらですよ、いま私が思っているのは、小学校でもこれだけあるということは、もしかしたら幼稚園・保育園でも起こっているんじゃないかと思って、いま私は親しい幼稚園とか保育園の園長先生たちと、幼稚園・保育園にもソーシャルワーカーとかカウンセラーとかを置いて、その時期から専門で子育て支援、保育をするだけではなくて、子育て支援、困った親の真ん中に立って、「ねえねえ、お母さん」という話をしていけるようなサポートを、幼稚園・保育園からしていかないといけないんじゃないかって私は思うようになって、幼稚園・保育園の園長先生たちと、それをやろうという話をいましているんですよ。

もしかしたら2、3年後、私は幼稚園・保育園で働いているかもしれないんですよ。でも、このルートで考えたら、たぶん2、3年後、私が幼稚園・保育園で働いていたら、もっ



と早く出会わないといけなかったこのお母さんたちが、子どもを産む前にとかということになったら、また思春期に戻るんですよ。いや、延々ループじゃんということに最近気づいてですね。だから誰か一人がどこか1カ所まで止めるのは、無理ということなんだって最近思うようになりました。

幼稚園・保育園の幼児教育とか保育とか、小学校の教育とかと、非行の問題ってすごく分野が違うような、少し乖離があるような気が私はしているんですけど、実はずっと子どもたちが育っていく中で、非行の根っこって小さいときから始まっているんですよ。なので、非行防止という観点でずっと小さいころから同じ考え方で、子どもや家庭に関わっていける大人がたくさんいるんだって、私はそう思うようになって、いろいろなところで子どもに関わる、家庭に関わる大人たちが、いろいろなところで同じ思いでいっぱい支援していけることが、社会の一員として大事なんじゃないかなって思っています。

## 思春期は子ども時代の総決算の時期 ～親や周囲の大人のプラスの関わりが大切～

特に、その中で思春期という時期は、子ども時代の総決算の時期だと私は思っています。特別な時期だと思っています。どういうことかということ、子どもたちが乳幼児期から学童期を経て思春期と育っていきますよね。その間に子どもたちはさまざまな関わりを受けながら育っていきます。

思春期に総決算されるものは何かというと、大人の関わりです。例えば乳幼児期から学童期を経て思春期まで育っていく間に、子どもは抱きしめてもらえる温もりとか、気持ちをはかしてもらえ喜びとか、たくさん見てもらえるうれしさとか、関わってもらえる楽しさとか、こういうものを経験しながら育っていきますよね。

でも、ここにいる誰一人として、いま私がスライド上に書いているもの（「温もり」「喜び」「うれしさ」「楽しさ」）は、「ほかほかしたプラスの関わり」というものですけど、このプラスの関わりだけで、ここまで育ってきましたという人はいないですよ。反対に子どもたちは、どのような関わりを大人から、親や学校の先生、地域の大人、全ての大人からどのような関わりを受けながら育っていくかというと、場合によってはたたかれる痛みであったり、離婚や死別などによって家族の形が変わる悲しみであったり、自分の気持ちを分かってもらえないつらさや怒り、いつも親がそばにいてくれない寂しさなど、こういうものも体験しながら子どもたちは育っていきますよね。

このプラスの関わりと、スライド下には書いているもの（「痛み」「悲しみ」「辛さ」「怒り」「寂しさ」）が「マイナスの関わり」と私は呼んでいるものですけど、これが思春期に総決算されると思っています。健康で自立した大人というのは、この思春期にプラスとマイナスの関わりが総決

算されてプラスになっていないと、健康で自立した大人にはなれないんですね。だけどさまざまな家庭環境の中で、厳しくて、つらい思いをたくさんした子どもというのは、マイナスの関わりがずっと多くなってしまいうんですよ。

今日、目の前のこの子に、全ての大人からの関わりがプラス10でした。マイナスは3でした。よって、今日はプラス7あるから大丈夫みたいに、大人から子どもへの関わりが数値化されて毎日目に見えれば、全ての子どもたちに対してプラスを保って育てていってあげることができんですけど、大人から子どもへの関わりというのは、数値化されて目には見えないので、家庭環境によってマイナスがずっと重なってしまう子というのが出てきてしまいうんですよ。

思春期にこれが総決算されてマイナスになってしまった子がどうするかというと、心だけ乳幼児期に戻ります。なぜかということ、このプラスの関わりが一番もらえる時期は本来乳幼児期だからです。でも、戻るのは心だけです。体とやることは戻らないので、また怒られたり叱られたり見捨てられたり、マイナスが積み重なってしまうんですね。

そうすると、いつまでもプラスに転じないので、いつまでも健康で自立した状態になれない。私が関わる親御さんにはこの表（子ども時代<乳幼児期から思春期まで>における大人のプラス・マイナスの関わりを示す表）をお見せして、いまこの子がこうやってさまざまなメッセージやサインを出しているということは、このプラスの関わりとマイナスの関わりでマイナスが多くなっちゃっている。だから、いまこの子たちはこういう行動をとっているの、いまからお母さんやお父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、





私たち専門家、みんなでプラスの関わりをたくさん注いでいってあげることで、この子の行動を落ち着けていこうという話を親御さんにしていけますね。

乳幼児期の子もたちの行動を考えたら、腹が立ったから手が出る、欲しかったから無理やり取る。3歳、4歳の子を三輪車に乗せて道路に出したら、全員暴走するじゃないですか。同じことを戻ってやっているだけなんです。それはプラスの関わりをたくさんもらうために、例えば少年院に何度も入った子どもに、親御さんが面会に行ったときにかける言葉ですよ。同じかける言葉でも、プラスの

伝え方もマイナスの伝え方もできちゃうんですね。例えば「ほら、あれだけ言ったのに、あんたはまた先輩の誘いを断らんけ、またこんなことになったやないね。あんたのことなんかもう知らん」とか「もう引き取らん」とか、そうやって言葉をかけてしまうと、またずっとマイナスの関わりが注がれていくので、いつまでたってもよくなりません。

少年院に面会に行ったときに、あなたがなくてどれだけ寂しいか、あなたの帰りをどれだけ待っているか、あなたがどれだけ大切か、あなたのことをどれだけ愛しているか、それをたくさんたくさん子どもに伝えていってあげることで、プラスの関わりがどんどん増えていくと、プラスに転じたときに、昔は悪かったけど、いまは全然頑張ってますみたいな大人はたくさんいますよ。

なので、私は、一人の人が思春期総決算されて、いろんな問題行動を起こしたときに、その後、更生できるかできないかの分かれ道は、その子自身の問題ではなく、周囲の大人の関わりがどれだけプラスを注げたかどうか。これが私は一人の子どもが更生できるかできないかの分かれ道を担っていると思っています。

## 愛着(心の安心・安全)を育てる3要素 ～「スキンシップ」「目を合わせる」「名前を呼ぶ」～

じゃあたくさん子どもたちにプラスの関わりを注いでいこうという話を親御さんたちにしていけますけど、特にどういう関わりで伝えていけるのかというと、スライド上に書いてあるプラスの関わり(「温もり」「喜び」「うれしさ」「楽しさ」)は、心理とか福祉でいうところの「愛着」というものを育てるものなんです。愛着は心の安心と安全のことです。心の安心と安全を育てる三つの具体的な関わり、要素は、「スキンシップ」「目を合わせる」「名前を呼ぶ」の、この三つといわれています。

スキンシップはなぜ私たちに必要なかということ、私たちは動物じゃないですか。人間って群れで生きる動物なんです。なので、群れて力を合わせて種の保存してきた動物なので、群れさせられるように脳に仕込まれているんですね。どうやって群れさせているかということ、スキンシップが必要というのが埋め込まれているそうなんです。必要だったら集まりますよ。そうやって力を合わせて群れて、種の保存してきたんですね。

必要というのが埋め込まれているので、必要なものが入ってこなければ不安定になりますよ。なので、スキンシップが必要です。これは心理学の実験で顕著に、1日15分、人にはスキンシップが必要。朝から夜眠りにつくまで、15分のスキンシップがあれば心が落ち着くという結果が出ています。でも、日本はハグをする文化もキスをする文化もない中で子どもたちは育っていきますよ。家庭環境が難しかったりすると、なかなかスキンシップがただでさえとれなくなって、必要な15分がずっと欠けていってしまうみたいなことが起こるんですね。

このスキンシップを増やしていこうというのを、地域とかでも私はお願いするんですけど、いま学校現場なんかですと、教員の不祥事みたいなのがいっぱいあって、できるだけ生徒と接触するなみたいな通達がいっぱい出ているんですよ。ええっ、また逆行しているじゃん。子どもを豊かに育てる、子どもの心を安定させるのに逆行しているって、私はいつも

その通知を見て思っているんです。だって、親に抱きしめてもらえない子が、ベテランの担任の先生に抱きしめられて心が落ち着いたりしているって、実際にいまでもあったと思うんですよ。だけどできない時代にどんどんなっていってですね。

そんな中である地域の方、朝の旗持ち当番をしている人が、「堀井さん。俺、堀井さんの話を聞いてね、街の中で朝旗持ちしているときに、子どもたちとハイタッチするようにしたよ」って。そうしたら、「子どもたちは本当に好きね、あれ」みたいな、「俺、いま大人気」みたいな、「大行列」みたいな。そうやって地域で関わる大人、たくさんの方が、家庭だけで子どもは育つものではないので、関わるたくさんの方が、そうやってスキンシップを持っていく。ダルクの方たちもハグしますよ。もう、あれはだからめちゃくちゃ理にかなっているんですよ。スキンシップはとっても大切です。

次に目を合わせるというのがありますが、これも受け入れられ体験ですね。目を合わせてもらうことで心が安定します。でも、思春期になった子たちへ目を合わせていっても、なかなか子どもたちはこっちを見てくれなくなっているんですよ。だけど私たち大人が見ていくということが大事なんです。ともすれば冷たい目と手で排除してしまおうとしてしまいます。悪い子どもたちを見たときに、冷たい目と手で排除するのではなく、温かい目で子どもたちを見ていくことが大切です。

タバコを吸っている子を見たら、「声をかけてくれよ」って言うように聞こえるじゃないですか。だから私は、ニコニコしながら子どもの方を向いてほほ笑みかけたら、むっちゃ怖がられますけど、私がもう変なおばさん、「知らない人についていけない」の教育が行き届いていて、目を合わせてほほ笑みかけたら、みんなからぎよっとされますけど、でもですよ、やっぱり心のことを考えたら、たくさんの方が子どもたちを見て、ほほ笑みかけるって、とっても大切なことなんですよ。

なので、なんかこの子は難しいとか、落ち着きがないとか、どうやってこの子と関わっていったらいいのかなという

ときは、手始めにとにかくニコニコしながら見つめていくことは効果的です。私も担当の子たちから「まじきもい」とか「まじ近い」とか「まじ来んでくれ」とか、いろいろ言われますけど、ずっと見ていったら、最後は絶対に子どもの方が諦めてくれるんですよ。なので、負けずにずっと目を合わせていくということが大事だと思っています。

それから最後に名前を呼ぶというのがあるんですけど、これもダルクのミーティングに、「はい、誰々です」って言ったら、「はい、誰々」みたいな名前を呼ぶミーティングがありますよね。あんなふうに名前を呼ぶということが心に実はとっても影響があるといわれていて、心理学の実験で、これも名前を呼ばれた回数、生まれてからずっとその子が名前を呼ばれた回数と、心の安定が比例しているという結果が出ているんですね。

困難なさまざまなリスクを抱えた家庭とかネグレクト、放任の家庭なんかを思い浮かべると、子どもへの関心が少なかったり、なかなか関われなかったりするので、必然的に子どもの名前が呼ばれる回数って少なくなっていると思うんですよ。反対に子どもの関心が高い家というのは、たくさん子どもが名前を呼ばれていると思うので。

そういう意味では、私も現場で確かになって思えるところがあって。なので、関わった子どもたちの名前をたくさん呼んであげる。私たちが関わる子どもたちというのは、もう絶対に呼ばれている回数が足りてない子たちなんです。なので、名前をたくさん呼んであげるのが大事です。

ちなみに、私はもう本当に仕事に時間も身もささげてきて、わが子はおじいちゃんとおばあちゃんに任せて、最少時間で子どもを育ててきた母親です。私の心の支えは、「子育ては量ではなくて質で勝負だ」というのが私の支えなんですけど、だけど子どもにはありますよね、絶対に必要な量も。その絶対に必要な量を、私はいつもぎりぎりでしたか満たすことができない。



とにかく限られた時間でこの三つの要素をギュッと子どもに注ぐぞと思いがちながらやってきて、いろんな行動の一つ一つの前に全部名前を付けるという。「サエちゃん、ご飯」「サエちゃん、お風呂」「サエちゃん、寝よう」みたいな。全部の行動に名前を付けようってやったんですけど、いや、絶対にこれでも足りないなって、他のお母さんに比べたら絶対に足りないなと思ったので、ただただ名前を呼ぶということですね。「サエちゃん」「サエちゃん」「サエちゃん」「サエちゃん」ってやったら、「なになに」「なになに」「なになに」って言って、めっちゃテンションが上がっていきんですよ。

その話をこの前、ある講演会でしたら、参加した男性の方が終わって私のところに来て、「堀井さん、あの名前を呼ぶ、うれしいのは分かる。俺、いまもう50前だけど、名前と呼ばれたら、めっちゃうれしい」みたいなですね。あっ、やっぱり名前を呼ぶって心に影響があるんだという感じで、なんかこの子は手がかかるなとか、落ち着かないなとかいう子どもがまわりにいたら、たくさん意識して名前を呼んでいってあげることによって心に効いていくので、こうした三つの要素を意識しながら日々の子どもたちとの関わりの中に生かしていくと、子どもが心の安心と安全を取り戻していくことができるというふうに思っています。

## 乳幼児期と思春期は繋がっている ～夜遊びの理由、大人が振り回されることの必要性～

私はたくさんのお思春期の子どもたちと関わってくる中で、乳幼児期と思春期という時期はつながっていると思っています。先ほどのように思春期にマイナスになってしまった子どもたちが乳幼児期に戻るといってもそうですけど、その乳幼児期と思春期はつながっているシリーズで、夜遊びというのがあるんですけど、私はサポートセンターで働きだして、たぶんおそらく10年ぐらいいは、なんで夜遊びをするのかということを考えてことがなかったんですよ。ヤンキーは夜遊びするものと思っていたんですよ。

たくさんのお子どもたちと関わる中で、なんでこの夜遊びの理由が気になるようになったかという、スマートフォンが普及して、さまざまなSNSを子どもたちが駆使して使うようになりましたよね。追いつけ追い越せは絶対ないですけど、追いつけ追いつけて、子どもたちが使っているようなアプリやSNSは私も一緒に使いたいな。

そんなことをやっている、時に「いまからどこを暴走できるやつ、スタンプ」とかあがつちゃっているから、速攻電話をかけて「どこをお走りになられるのですか。管轄の警察署に連絡しておきますけど」みたいに、事前に手が打てても便利だと思っているんですけど。そんなふうに、リアルに、いま関わっている子どもたちが、誰とどこで何を、何を感しているのかというのが、このSNSの普及で手にとるよう

に分かるようになったんですね。

そうしたら、子どもたちが活動し始めるのって夕方からなんです。その夕方からですね呼びかけ合いが始まるんですよ。「一緒に集まろう」とか、「誰々の家、集合。来ないやつはブロック・削除」みたいなですね。その集まり方が、ちょっと暇つぶしに集まろうぜのレベルじゃないんですよ。その時間から絶対に誰かと一緒にいないといられないほどのエネルギーで、子どもたちはその行動を繰り返すんですね。

親だって必死で止めようとして。玄関に布団を敷いて見張ったり、出られないようにしたり、お父さんとお母さんで24時間態勢で順番に代わって見張ったりするんですけど、そんなずっと寝ずに見張れるのなんて限界があるから、ふっと眠りに就いた瞬間に、その上をまたいで出ていったりですね、4階のマンションをつたってでも外に出ていこうとするわけですよ。その子どもたちのエネルギーを見て、なんでこの子たち、この時間からこんなに誰かと一緒にいないといられないのかな、家じゃ駄目になるのかなというのが、すごくSNSを見ることで感じられるようになったんですよ。

なんで夜なのかなというのを、ずっといろんな相談の中で、そこに焦点を当てて聞き取りをするようになったんですね。そうしたら、ある担当の中学校2年生の女の子が、SNSに悪口を書き込まれたことがきっかけで、相手の女の子と話し合





いに行き、話し合いの結果が、最初は話し合いだったのに、なぜか最後、タイムスを張るということになったらしくて、全然意味が分かんないんですけど、私の担当の子が相手の女の子を殴ってしまって、傷害事件で逮捕されたんですね。

鑑別所にその子は入りました。私たちは、鑑別所に入ったら面会に行って、そして必ず私は聞きます。「これからどうするの」って。そうしたら、この子から返ってきた言葉は、「堀井さん、私もう大丈夫」って言うんですよ。この鑑別所と少年院で聞く「大丈夫」が、全然大丈夫じゃないやつなんです。なので、もう私も「大丈夫」とか言われたら、もう三枝師匠（現桂文枝師匠）のように椅子から転げ落ちそうになるんですけど、本当に大丈夫な子は「不安」と言うんですよ。「もしいま出てしまったら、もしかしたらまた誘いを断れずに行ってしまうかもしれん」とか、「また悪いことしてしまうかもしれん」「出るのが不安だ」という子は、結構出てからも頑張れる子なんです。だけど「大丈夫」と言う子が、もう3日と持たないんですよ。だからもう、大丈夫じゃないというようにしないといけません。では、この鑑別所にいる期間の間に、どうやってこの子に不安という感覚を持ってもらえるかというのを必死で考えながら、私は面会を繰り返すんですけど。

私は、その子に伝えたのは、「分かった、大丈夫」と言うので、「じゃあこれからどうするの」って聞いたら、「どうやって大丈夫にするの」って聞いたら、「堀井さん、私、学校に行く」って言うんですよ。「うんうん。なんで」って聞いたら、「私、学校に行かんけんさ、昼間寝るやん、夕方起きるやん、暇やけん先輩たちと遊ぶやん、朝に家に帰るやん、疲れとるけん寝るやん、夕方起きるやんで、悪いことするやん」って。だから学校に行けば、「私、学校に行くやん、夕方に家に帰るやん、疲れとるけん寝るやん、朝起きるやんで、もう悪いことせんやん」みたいな、もうなんてサクセス・スペシャル・ストーリーみたいな、そんなうまくいかないじゃないですか。

うまくいかない理由は、私はその子に伝えたのは、「いや、堀井さんは学校に行かないことが、いまの生活のスタートじゃないと思っているよ」って、その子に伝えたんですね。そうしたら「なんで」ってその子が言ったので、「だって、毎日の呼びかけ合い、ちょっと暇つぶしに集まろうかのレベルじゃない。あなたはあの時間から寂しくて寂しくて、誰かと一緒にいないといられない、その寂しさの原因に気がつかないよ、この生活は変えられないよ」ってその子に伝えて、「なんで寂しくて寂しくてたまらないのかって、その理由を一緒に探そう」って言って、この子との面会を繰り返したんですね。

そうしたら、何回目かの面会のときに、この子がうれしそうに「堀井さん、分かった」って言って待っていてくれて、「うんうん、どうだった」と言ったら、この子の家は親御さんが

全国をまわる旅芸人をされている家の子で、幼稚園までは一緒についていけていたんですけど、小学校に上がってずっとならなくてはいけないということで、おじいちゃん、おばあちゃんに預けられて生活していたんですね。なので、お父さん・お母さんに会えるのはもう年に何回かみたいな状態ですね。

それで夕方、この子が小学生ぐらいのときに公園で遊んでいると、5時を過ぎると友達たちは「帰らないけん」「帰らないけん」と言って、みんな帰り始める。とうとう、いつも公園に最後ぼつんと残るのは、自分と弟だけだった。とうとう帰るしかなくなって、とぼとぼと家に帰り始めると、「堀井さん、知ってお？ 夕方の街の中って、ご飯の匂いとかお風呂の匂いとかいっぱいしてくる。そうしたら、帰っているときに、うちの家にはないのに他の家にあるものが、他の家には当たり前にあるのに、うちの家にはないものが、待っている人、温かいご飯がないことが気にかかるようになって、そのときに感じるざわざわした、あの寂しい感じが嫌で嫌でたまらなかった。そんな中、中学生になって先輩たちに遊びに誘われるようになったら、夕方からあのいつも感じていた寂しいという感覚を味わわなくて済むようになった。それから先輩たちと遊ぶのが止まらなくなった」と、この子はそう言っていました。夜に集まる子どもたちは、夜をも恐れぬ強い子どもたちじゃなくて、夜になると寂しくて寂しくて仕方のない子どもたちが集まっているんですね。私はこの子の寂しさの原因が分かったので、そのことをお父さん、お母さんに伝えました。

ただ、私たちの関わっている家って、ここの家は分かりやすすくないなかったことが原因でしたけど、たむろしているメンバーの中には親が家にいて、温かいご飯もあるのに集まっている子もいるわけですよ。

だから物理的にないことだけが原因ではないよねって思うようになって、いろんな子たちの聞き取りをする中で、子どもたちになにかあるかの目に見えるもので子どもたちって判断してしまうんですね。この子は親がいなかった、だから愛情もなかったと感じてしまっていたんですね。

でも、親は仕事でいなかったかもしれないけど、愛情がなかったわけではないですよ。生活のために家を離れて仕事をしなければならぬこともありますよね。そういう子どもたちがみんな非行に走るわけではないですよ。いなかったとしても、きちんとあるもの、愛情はある、愛している、大切に思っている。それをしっかりと伝えられれば、子どもはたとえいなかったとしても健やかに育つことができるんですね。

反対に、いたとしても愛情が伝えられていない場合には、愛情があると感じられずにいたとしても、子どもたちが寂しくて、どこかに集まらなければいけなくなってしまふことはあるんですね。

なので、私は夜遊びをしている子たちと関わりが始まったら、その子があると感じているもの、ないと感じているものを整理して、きちんと親の愛情をプラスの関わりで伝え直す、その作業をしていくことで、この子の行動を落ち着けていくという関わりを支援としてやっていくんですね。

この「振り回される」というのをもう一例（スライドに）書いていますけど、これが先ほども冒頭の紹介で浜井先生が言ってくださった、私は子どもが大人を振り回さないといけないう量って、あらかた決まっていると思っています。でも、思春期に入って非行でいろんな大人を振り回していますよね。私、警察官が暴走族を追いかけているのを見ても、ああ、振り回したいだなんて、警察がああやって振り回されてあげ



て、「俺、ここにいるよ」というのを、あの子たちは感じているんだなとか思ったりとかですね。

それから暴走族排除の活動とか警察はやっていますけど、その暴走族の担当の警察官とかと話をするとときに、「本当に暴走族をやめさせる気ありますか」って私は言うんですけど、「いや、あるよ」「なんでだよ」「撲滅週間とかやっているじゃないか」みたいなことを言うですね。

でもでも、だって、あんなことをやったって、より爆音を鳴らして走るだけです。本当にあの子たちを止めようと思うなら、その走る地域に、地域の力を借りて5張ぐらいテントを立てて、おでんコーナー、ラーメンコーナー、UNOコーナー、話を聞くコーナーみたいなことをやって、ブンブンブン、ブンブンブンって来たときに、「ああ、よく来たね、よく来たね」と言って、おでんを食べさせて、ラーメンを食べさせて、UNOをやって、ドンジャラをして話を聞いたら、全員（バイクを）押して帰ると思うんです。

本当にやめさせる気とかないでしょう。追いかけて、遊んじゃってみたいな話をよくしたりするんですけど、振り回されてあげる。振り回されるって大変じゃないですか。暴走族を追いかけて回すって大変なんです。危ないじゃないですか。他の人も巻き込まれるかもしれないし。だから振り回されなくて、振り回される前にしっかりこっちが関わっていっちゃえばいいんですよ。そうしたら、子どもたちは振り回されない



いけない量をみんなで埋め合わせていって、そうしたら、落ち着いていくんですね。

よく親御さんから「堀井さんまでこんなに巻き込んで、振り回して、すみません」って言われるんですけど、いや、この振り回されることが大事なんですよ。だから、みんなでちょっと大げさに振り回されてあげよう。こんなに探したんよとか、こんなに電話したんよとか、こんなに待ったんよって、大げさに振り回されてあげることで、子どもたちの行動を落ち着けていこうという関わりをですね。親だけで振り回されるのは大変なので、みんなで振り回されてあげるみたいなことをしていく必要があるなと思っています。

## 保護者支援の重要性 ～6大関わりではなく、子どもの立ち直りに何が必要なのか～

子どもたちが私のところに来るときに、多くの大人から、だいたいこの「6大関わり」というものを受けて私のところにたどり着きます。「怒る」「叱る」「諭す」「泣き落とす」「約束をする」「環境を除去する」と（スライドに）書いていますけれども、この6個は本当にそれをやってはいけないということを知らなかったという、1回目、2回目だったら、これらを駆使して止めることはできるとしています。一過性の問題行動もありますよね。

ただ、これらを何度も組み合わせながら子どもに伝えただけにもかかわらず、それでもまたやってしまう子に対しては、あと何回これらを繰り返しても止めることはできないんですね。なぜならこの6個というのは、それをやったら駄目だよということ教えるための関わりですね。いろんなコミュニケーションを通して、それはやったら駄目なんだよってことを必死で伝えているわけですね。

でも、私たちの関わっている子どもたちというのは、それをやってはいけないということを知らなかったから、やっている子たちじゃないんですよ。それをやってはいけないということを知っていても、やっちゃっている子たちに対して、あと何回、それをやったら駄目なんだよってことをいろいろな方法で伝えたとしても、「いや、それは分かっています」という。でも、どうやってやめるかが分からないんですよ。なので、

どうやってそれをやめていくのかという、細かいやめ方まで支援していかないと、子どもたちってやめていくことができないと思っているんですね。

環境を除去するというのとはどういうことかという、財布からお金を持っていくから財布を隠して寝るとか、リストカットをするからカッターナイフを取り上げるとか、ゲーム依存になったからゲームを取り上げるとかですね。それは、一時的には意味があると思いますよ。でも、永遠に財布とかあるじゃないですか。カッターナイフをどれだけ取り上げても、最後グミの袋を破った、その箇所でリストカットをする子もいたし、環境を除去し続けることなんてできないですよ。私は、親御さんには、一時的には財布を隠して寝ることは意味があるかもしれないけど、それで直ることはないよって。たとえそこに財布があったとしてもとらない子にしてあげたいという話を、親御さんに伝えていくんですけど。

そうやって子どもたちへの支援というのは、怒ったり叱ったりすることではなく、その子が本当になぜとらなければならないのかという、原因のところに入り込んでいくことで、それはほとんどの子どもたちが私は共通して寂しさを抱えているので、いかにこの寂しさをみんなで埋め合わせていってあげるかということが、重要な支援になっていくんじゃないかなって私は思っています。

## 近所のおばちゃん最強説とは ～相談が終わっても子どもたちに関わり続ける～

私は、さまざまな支援を、いろんな幅広いバラエティーに富んだ支援をさせてもらってきました。私は一人の子に関わりが始まって、支援って引き継ぎが難しいですよ。うまくいかないんですよ。人についているじゃないですか、相談って。だから転動したのだから、年齢が変わったのだから、人がか

わりますって言うても、なかなか子どもやご家族って受け入れられなかったり、なつかなかつたりということがあるので。

一貫した大人の関わりが子どもの立ち直りには重要だともいわれていますけれども、わりと警察は理解があって、転動して管轄が変わっても、福岡県警は、「もともとあっちのサポー

トセンターで私が関わっていた子が、またこんな問題を起こしたからちょっと行っていいですか」とか（私が）言ったら、「いいよ」と言ってもらって、わりとずっと長く関わられたんですね。

そうやって、例えば年齢をこえたとか管轄が変わったとなったら、私は先ほどの（浜井先生の講演者）紹介でも言っていたように、公私の区別がとっても苦手な支援者です。なので、業務で相談が終了したら、そこからは知り合いのおばちゃんとしてその子たちと関わっていくんですけど、私は知り合いのおばちゃん最強説を持っていて、警察のサポートセンターの職員だったらできないこともあるじゃないですか。相手の職場に電話して、「この子は明日から行かせません」って言うとか、なかなか、「なんで警察の職員がそんなことしてくるんだ」とか言われたら、いろいろ説明できなかつたりするので、ちょっとこれはできないかなみたいなですね。でも、近所のおばちゃんだったらできるじゃないですか。「明日からおまえのような職場には行かせん」と言って、電話して切るとかできちゃうじゃないですか。近所のおばちゃん最強説を持っていて。なので、相談が終わったら近所のおばちゃんとして子どもたちと関わるみたいなことをして、いろんな工夫をします。

（「来所相談の様子」の写真をスクリーンに映す）来所相談でサポートセンターに、写真のように金髪の子保育園みた



いに「おなかやすいた」と言って流れ込んで来て、みんなでラーメンをつくって食べるとか、ネイルがしたいという子がいたら、ネイルキットをみんなで買って練習してネイルをやってみるとか。下の写真は、刑務所から出所してきた日に挨拶に来てピースで写っている写真です。

あと多機関連携も大事といわれていますけど、私たちが関わるときはオフィシャルな機関だけではやっぱり支援って難しかったりします。例えば入れ墨を安く消してくれる病院とつながるとか、産婦人科も、私たちの関わる子どもたちは、わりと早く出産をしたり親になったりするので、産婦人科とか出産の子育て支援みたいなものもやったりしています。

## おわりに ～立ち直り支援の最後の難関、本当の意味での「就労支援」とは～

それから最後、非行少年たちの支援の最後の登頂って、私は就労支援だと思っているんですよ。就労支援って本当にエベレストの登頂と同じだから、むちゃくちゃ難しいんですよ。就労がやっぱりその後の更生に大きな影響を与えるといわれて、就労支援、就労支援って簡単に国は言うけど、それがどれだけ難しいことかって私は感じていて。

スクリーン真ん中の写真は警察官2人が洗濯機を運んでいるところなんですよ。就労支援をした子ども、女の子を福岡で有名な野口石油というところで雇用してもらったんですよ。そうしたら、その従業員の息子さんたちから、「堀井さん、来んよ」って電話がかかってくるんですよ。

うそ、うそでしょうみたいな感じで家を見にいったら、なんか一人暮らしを始めたばかりで、それも親から反対された一人暮らしだったから、家電が1個もない中で、とにかく部屋だけみたいなところで一人暮らしを始めて、働くことになっていたんですけど。私が（会社の方から）「（会社に）来ない」って言われたから家まで行って、ピンポンって鳴らして彼女の部屋に入ったら、家中びちょびちょの作業着が干されてあったんですよ。もう下がびちょびちょで、家が湿気だらけで、「えっ、なんこれ。どうしたと」って言ったら、「洗濯機がないけん風呂で洗って、手で絞って干したら、全然絞れん

けん、乾かんけん、いけん」みたいなことを言われて。

「それはいけん」ということになって、私の連携先にはリサイクルショップの店長さんがいたので、その人にいま一番安く手に入る洗濯機はいくらですかと尋ねると、「3,000円であるよ」って言われて、「よしよし、はいはい、カンパ、カンパ、カンパ」って、サポートセンターの中でカンパをしてもらって、3,000円で洗濯機を買いました。（スライドの写真を見ながら）この人が、警察官になる前に電気工事していた方なんですよ。その人に「えっ、取り付けられるよね」とか言って。彼女の住んでいるアパートがぼろぼろだったから、もうコンセントなんて壊れていて、電気工事とかやりながら洗濯機をつけているというシーンがこの写真ですね。

ここまでやらないと就労支援ってできないんですよ。ただ職場、雇用主を見つけて、そこに子どもたちを結びつけば働けるってもんじゃないんですよ。なので、就労して最後の最後までしっかりみんなでここまで支援していくということが、私は本当の立ち直り支援だと思っているので、「なんで警察が洗濯機をつけなきゃいけないの」とか言っていたら、立ち直らないですよ、子どもって。

だから本当にできることを、みんなで知恵を絞り出しながらいろいろなことをやっていく中で、「ああ、あのときはああやって」。いまは笑い話ですよ。あのときに洗濯機を私たちが運んでですね。「私たち」とか言っているけど、私は1ミリも運んでいませんけれど、あの2人が頑張って運んだんですけど、運んで取り付けってくれたということが、「ああ、明日は行かなきゃな」という気持ちに変わっていくという、それが就労支援だと思っています。こんなふうに、ありとあらゆることに工夫をしながら、子どもたちと関わっていくことが必要だなと思っています。

皆さまとこれからも、この思いを同じく、この同じ日本で活動していけることを願って、私の話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。（会場拍手）





**司会者** 素晴らしいお話をありがとうございました。健やかに育つ、「少年法」でいう健全育成の「健全」、そういうふうに育つ機会を奪われている少年たちの本当に痛ましい状況に、胸を突かれるような思いがしつつ、すごく明るくポジティブで力強い堀井様のお人柄にも大変感銘を受けました。

皆さまももっともっとお話を聞きたいと思われると同時に、直接いろいろ質問したいと思われる方もいらっしゃると思いますので、ここからは質疑応答の時間とさせていただきます。

質問は、昨年までは（新型コロナウイルス感染防止のため）直接していただくことができなかったんですが、今年は直接マイクを質問される方のところにお届けします。質問のある方は挙手をお願いします。

**質問者A** どうも素晴らしいお話をありがとうございました。2点ご質問させていただきたいと思います。

1点目は、先ほどの「6大関わり」というお話がありました。これとその前にお話をされた、プラスの関わり、マイナスの関わりですね。これをどういうふうに結びつけるのか。たぶん「6大関わり」をしないために、プラスの関わり、マイナスの関わりがあるのかなと思うんですけど。

2点目ですけども、本当に現場でさまざまな経験をされて、素晴らしいご指導をいただいたと思うのですが、そういうエネルギーがどこから出てこられたのか。とても私には考えられないような素晴らしい経験なんですけど、そのエネルギーの出場所をお話しただけならなと思います。

**堀井氏** ありがとうございます。「6大関わり」は、本当に幼稚園・保育園、小学校の低学年ぐらいだったらきくことがあるので、最初に試してもよいと思います。指導がまったく無意味と言っているわけではないので。ただ、「6大関わり」だけでよくしようとするということは無理があるので、その後にプラスの関わりをいっぱい注いでいってあげるということが必要なんです。プラスの関わりとマイナスの関わりとの初動のところが「6大関わり」で、あそこからいろんな関わりが、いろんな人が始まっていくと思うんです。だから、問題行動が起こったとき、その子どもや家庭に関わっていく一番最初のチャンスですね。ここを糸口にプラスの関わりをしながら、その後、「6大関わり」を最初にして、その後、プラスの関わりを増やしていくということが必要なというふうに思っています。

2点目の原動力ですよ。それをめっちゃ聞かれるんですけど、分からないんですよ。ただ、めっちゃ子どもが好きなんです。もうそれでたぶん頑張っているし。でも、子どもが好きと言っても、私、愛されて、満たされて育っている子には1ミリも興味がないんですよ。本当にもらえるべきはずの愛情をもらえてない子どもたちを見ると、本当にほっとけなくなるという、何かしてあげたいと思うのが、たぶん性分なんですよ。小さいころから、母親からも本当に「おせっかいだ、おせっかいだ」と言われて育ってきましたから。それが私の性分だと思っています。

**質問者A** ありがとうございます。

**司会者** 次のご質問のある方、どうぞ。

**質問者B** 先ほどはお話をありがとうございました。

自分もプラスの関わり、マイナスの関わりからの質問な



んですけど、そのプラスの関わり、マイナスの関わりというものを、支援する少年たちやその親とか家族、その他の親族、学校の人、さまざまな関わりの中で、いきなりそれをするのは難しいかなと思うんですよ。そこで堀井さんが、家族や学校の方にプラスの関わりを増やすような声かけとか、そういうことをしたときのエピソードなどがあれば教えていただきたいです。

**堀井氏** ありがとうございます。もうプラスの言葉かけとマイナスの言葉かけは、たぶん意識しないで伝えていますね。親がマイナスの関わりをしちゃうとき、怒ると感情を伝えるときが一番分かりやすいかなと思うんですけど、怒って伝えちゃいますよね。でも、怒るときも愛情を伝えるチャンスだよって、私は親御さんに伝えるんですよ。なんで怒るかっていったら、子どものことが心配で、子どものことが大切で、このままだと不安だから怒っていますよね。でも、怒るというフィルターを通すと、大事だとか、愛しているって感情が伝わらなくなっちゃうよということをお伝えしています。

なので、怒るときも愛情を伝えるチャンスだから、このままだったらどういうことが心配でとか、このままだったらこうなっちゃうんじゃないかって不安で不安でたまらないとか、そういう心配と不安を伝えながら、あなたのことが大事だから怒っているんだよという、その大事なんだということをしっかり伝えていくことで、同じ怒ってしまうとマイナスの関わりになるけど、同じことを伝えるにしてもプラスの関わりに変えて伝えていってあげることができるんですよ。

だから特に最初に気をつけてもらうのは、やっぱり怒るときのメッセージの伝え方を工夫していくことで、かなりマイナスの関わりが改善されていくと思うんですよ。親御さんや学校の先生も怒るんですよ、めっちゃくちゃ怒っちゃうので、先生も怒っているときというのは不安になっているときなので、「先生がこういう行動を君がとることで、こういうことが心配で不安なんだということをお伝えたらいい」と言ったら、先生たちも「あっ、そうか」ということで、その方が子どもたちも受け取りがよくなるという循環が生まれるかなと思います。

**質問者B** ありがとうございます。

**司会者** 次のご質問のある方、どうぞ。

**質問者C** ご講演をありがとうございました。質問というよりは悩み相談みたいになってしまうかもしれないんですけど、

私は塾講師として働いているんですが、「塾に行く」と言っ  
て夜遊びに行ってしまう子がいたりとか、サークルでも手  
が出てしまう子とかがいるんですが、そういう子たちに対  
して、まずは塾に来るのが楽しくなるように、いっぱいしゃ  
べったりとか名前を呼んだりとかいうことをして、この  
講演の中で、それがよかったのかなというふうに思ってい  
るんですけど、受験とかになってくると、「学校へ行こうよ」  
とか「塾へ来ようよ」と言いたいときがあって、それが大  
人の都合なのかなと思って、言っているのかわからないと  
きがあって、そういう子たちに対して、もし堀井さんならど  
ういう声かけをなさるのかをお聞きしたいです。

**堀井氏** ありがとうございます。来ないときに、来ないだけ  
じゃなくて、子どもがとった行動で「なんで」と思ったとき  
に、九州弁だったら「なんしょん」って言っちゃうんですよ。  
でも、「なんしょん」は子どもの心にシャッターを下ろさせ  
る言葉かけなんですよ。「なんで」とかは、やっぱり責  
められているとを感じる言葉なので、「なんで来なかったの」  
とか「なんでしないの」とか、「なんで」は使わないよう  
にしようという話を先生方などはするんですよ。

「なんで」じゃなくて、「なんで」は、もうやってない駄  
目な子というメッセージがそこにプラスされちゃっているの  
で、そういうことを敏感にあの子たちは感じとるから、私は  
「どうしたん」という言葉を使います。「来んかってどう  
したん」「今日は遅れているけど、どうしたん」「どうして  
来んかったけど」とか、すごく怒っている子に「どうしたん、  
そんなに暴れて」とか、「どうしたん」に変えてあげると、  
心配されている言葉なので、心配のメッセージというのは、  
子どもは結構受け取れるので、心配して言葉をかけてあ  
げる。

「もともとは、あなたはできる子なのに、やらんでどうし  
たん」みたいなニュアンスで伝えてあげると、駄目な子っ  
て最初から決めつけられているわけじゃないということが  
伝わるので、一応、こっちのメッセージは伝わると思うん  
ですよ。

待っても待っても来ないとか、私もこうやって面接して  
いても、「キャンセル」と言ったらかっこいいけど、ブッチ  
とかもいっぱいあるんですよ。行ったらいないとか、来  
なかったとかいっぱいあって。でも、なんか私は、これぞ  
福祉みたいな。もう行って会えないのが福祉みたいな。(家  
に)ピンポンしに行って、「はい」で出てくるみたいな、ええっ  
みたいな、逆にそういう家は、あんまり私のニーズはない  
のかなって思うんですよ。

だから、なかなか言っても来てくれないとか、そういう  
子がいたときこそ私は、こういう子がいるから私の意味が

あるみたいに、さっきの言うポジティブに捉えて、とにかく  
やり続けていくことですよ。

いま関わっている私たちの関わりが、いまその子たちに  
分かってもらうというのは、ちょっと難しいのかなと思うん  
ですよ。でも、その子がずっと生きていったときに、ふっと、  
あのとき、あの人がこうやって関わってくれたなというこ  
を思い出してもらえただけでも、まあ十分なのかな。一人  
の人が育っていくときに、一人の人が一人の人を救えるな  
んてあり得ないですよ。

なので、ふっと思い出したときに、私たちのやったことっ  
て絶対無意味じゃないので、来てくれなくても思い続けて  
きてほしい、「待っているよ」というメッセージを伝え続け  
てあげるといって十分なんじゃないかなと思います。

**質問者C** ありがとうございます。

**司会者** 次のご質問のある方、どうぞ。

**質問者D** 今日は素晴らしいお話を本当にありがとうございました。  
気持ち明るくなったんですけど、私は非行  
の親の会に少し関わらせていただいているんですけども、  
相談内容が、昔は暴走族とかそういうものがメインだっ  
たんですけど、いまはもうほとんどそういうものじゃなくて、  
オーバードーズとか、いまテレビでやっているホストの問題  
とか、そういうものが非常にメインになってきたんですけ  
れど。

今日の先生のお話だと、どちらかというと非常に明るく  
仲間意識があって、もっとSNSみたいなところに潜って  
いってしまっただけで孤立化しているような、根っこは寂しさ  
という点でまったく同じだと思うんですけど、その辺の対処は  
どういうふうにしたらいいとお考えでしょうか。

**堀井氏** ありがとうございます。私が警察で働いている20年  
の間に社会が大きく変わって、非行じゃなくなりましたよね。  
子どもたちの問題行動の出し方が、外で元気に非行するタ  
イプではなくて、いま言うてくださったように、薬物も大麻  
とかが流行ってきて、みんなで縦の社会で使うみたいな感  
じじゃなくて、もっとライトにファッションブルに使うみた  
いな感じになりましたし、家庭内暴力とか、どちらかというと、  
自分に向く、家庭内でするみたいな、そういう問題行動は  
増えてきたんですよ。

やっぱり関わり方は、非行の子とはちょっと違うんですよ  
ね。というのが、非行の子というのは結構強引に関わって  
いっても関係がつかれたんですけど、どちらかというと引き  
こもり、自分に向かうタイプの子は、ぐいぐいいくと、わり  
とシャッターを強く閉めちゃうので、程よい距離を、ずっと  
ドアを開けないよ、開けないよ、開けないよみたいな中で  
距離感を保っていくみたいな。

あの写真も、山登りをしている子は引きこもりで、家庭  
内暴力で事件になった子なんですけど、ずっと私はドアが  
開けられなくて。ヤンキーだったら、あざをつくって無理  
やり押し合っても全然オーケーなんですよ。「なんだ、こ  
のおばさん」で終わるんですけど、こういうタイプの子は、  
無理やりドアを開けて入っていったら、もう二度と会って  
もらえなくなるんですよ。

なので、どうしたかという、私はドアの下に隙間があ  
ることに気づいて、もう1年ぐらい児童相談所の人たちと  
かいろんな関係機関の人たちと家庭訪問したけど会えなく  
て、誰も会えなくて、ドアの下から私の写真を入れたり、「会  
いに来たよ」とメッセージを入れたりして、そのうちに







親御さんに、もし暴れたときには110番してほしいってエンパワーして、親御さんが110番して、この子が医療につながるということになったんですけど。

わりと、やっぱり力技ではなくって、押しすぎず、でも、諦めず。そういう自分に向かうタイプの子は大人が無理やり入ってくることで、なんでそこに相談したんだとか、なんであいつに言ったんだとか逆上して、かえって危なくなるケースがあるので、行くことで危険になるんじゃないかというふうに考えられて、見守りと言われるケースがすごく多いんですね。

でも、私はこの見守りが大嫌いなんですよ。何それ、見守りって放置でしょとっていて。だから見守りは絶対駄目なので、何らかの形でやっぱりアクションを起こして、最後のドアは開けないけど、ずっと距離を保ちながら、長く時間をかけて最初の接触を試みていくということが、ああいうタイプの子は大事だなというふうに、いまは思っています。また10年後は違うことを思っているかもしれません。

**質問者D** ありがとうございます、

**司会者** 次のご質問のある方、どうぞ。

**質問者E** 本日の法務省発表の「犯罪白書」でも出ていますし、ずっと前からいわれているのに、うちの役所は遅いなど思っていたことの中に、逆境体験がある、被虐体験とかいろんなものがある人がいて、そういった人たちについて、ちょっと先生に所感とか経験とかを質問したいのですが。

そういった体験がありながらも犯罪はしない人、そういった体験がありながらも声かけをしたり何か関わっていたら、早く立ち直る人、なかなか立ち直らない人。私の経験もそうだし、先生がいままで見てきた子の中で、どういふふうなアプローチをしたりとか、どういふふうな関わり方をしたら、そういう逆境体験があっても早く立ち直ったりしなかったりということがあるのかということが質問事項です。あとは感想なんですけど、今日、いろんな話を聞いて、必要な関わりがいろいろあったり、大人が、簡単に言うと対症的にやる「6大関わり」の話は、いま鑑別所において、前は刑務所や少年院で働いていて、保護者に働きかけをしても、この親は分かんねえやつだなど思いながら勤務してきたのが、いままでの勤務だったんですけど、要は、彼らが元に戻る環境は、親御さんは40、50になって、やっぱり30年生きてきてとか、すぐには変わらないので、そういう視点はあるけど、あんたはどうなんだという話をいつもしているところなんです。その中で、先生の今日のご講演は大変ためになるというか、示唆に富んだ講演でした。ありがとうございました。

**堀井氏** ありがとうございます。逆境体験なく非行に走る子

は、もう私は一人もいないとっていて、みんな持っているんですよ。

10代で非行して元気にやっていた子たちが、20代でどうなっていくかという、もう非行をやり尽くして、これをやったらこうなる、ああなるというのが分かって、非行に飽きてくるんですね。もうどうなるか、捕まって、こうなるって見えてくるので、制限もかかることもあって。

そうすると、その後どうなるかという、死にたくなるんですよ。私は関わっている子どもたちが20代、30代になっていって、すごい元気でやんちゃだった子が、死にたくなっている子がいっぱいいてですね。その子たちに何をしてあげられるのかというのを考えたときに、やっぱりトラウマ治療にたどり着くんですよ。

ただ、非行をやっている真っ最中のときに「トラウマがあるよね」と言って、「トラウマの治療しようよ」と言っても、まだあの時期の彼らというのは、それを到底受け入れられる時期じゃないし、その認識って難しいと思うんですよ。なので、私はずっと伴走して。

絶対にあの子たちにそういう時期が来るんですよ。20代半ばからですね。だからそのときに、トラウマ治療できる先生とかとしっかりつながっておいて、ああ、もうその時期が来るとよって、もう10代で非行して、ごまかして、自分の心の傷とか寂しさをごまかして一生懸命悪いことをやって、だけどそれもやり尽くして20代になったら、もうそれではごまかせなくなって、ごまかす方法がなくなって、死にたくなるというのが、それがもう正常な流れだよということ子どもに伝えて、「やる時期が来たよ」って、「トラウマ治療する時期が来たよ」と言って、つなげていくということが大事だなと思って。

やっぱり段階があるかなと思っています。本当はみんなトラウマがあるから、早い時期にトラウマ治療をやった方が。だからアメリカなんかは、かなり早い時期から、もう虐待環境で育った子は、みんなEMDRのトラウマ治療をやるみたいな、そういう体制が国としてできていますけど、日本はまだそれが構築されてないので放置されていますよね、はっきり言って。虐待された子たちは放置されて、その結果、非行とかでごまかしているんですけど。

トラウマ治療が必要だなと思っていると、症状がそこまで非行が進んでなければ、ライフ・ストーリー・ワークみたいなもので、逆境体験の整理を幼いころからしてあげて。さっきのように、認知がゆがんでいる部分がある、うちの家庭になかったと思っているものが、なかったわけではなかったんだということに気がついていけるようなアプローチとかは、私は入れられる子は入れたりしています。

なので、やっぱり最終的には、その対症療法ではなくて、一番根っこにあるトラウマの治療が大事じゃないかなと思っています。

**司会者** ありがとうございます。ご質問くださった皆さま方、本当にありがとうございました。残念ながら、これで時間になってしまいましたので、質疑応答の時間は以上といたします。

堀井さま、本当に素晴らしいご講演をありがとうございました。皆さま、いま一度大きな拍手をお送りください。(会場拍手)

# 第14回 矯正・保護ネットワーク講演会開催案内

主催：龍谷大学矯正・保護総合センター

**参加費無料**

要事前申込

先着300名様

テーマ

## 再生 ～西鉄バスジャック事件からの編み直しの物語～

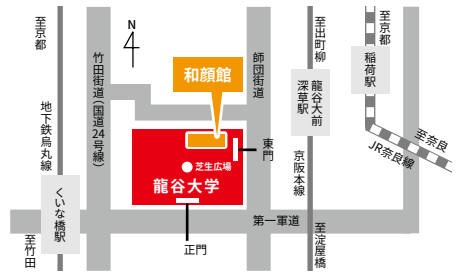
2024年12月14日(土)

13:30～15:00(開場 12:30～)

龍谷大学 深草学舎 和顔館 B201教室

(京都市伏見区深草塚本町67)  
JR奈良線「稲荷」駅下車徒歩約8分  
京阪本線「龍谷大前深草」駅下車徒歩約3分  
京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋」駅下車徒歩約7分  
**構内に駐車場はございません。**  
**公共交通機関をご利用ください。**

会場が変わりましたのでご注意ください



■ 講演



やまぐち ゆみこ  
**山口 由美子氏**  
(不登校を考える親の会「ほっとケーキ」代表)

>プロフィール

- 1985年 子育てに悩み、塚本達子主宰「幼児室」に通う
- 2000年 西鉄バスジャック事件に遭遇し、重傷を負う(塚本さん死亡)  
// 参議院法務委員会、少年法厳罰化反対の立場で参考人として出席
- 2001年 親の会「ほっとケーキ」を仲間と共に立ち上げ、代表となる
- 2002年 親の会を母体に、不登校の子どもの居場所開設
- 2006年 佐賀少年刑務所にて「被害者の視点を取り入れた教育」の一環として、月一回講話(現在に至る)
- 2012年 九州大学大学院統合新領域学府入学(ユーザー感性学専攻)
- 2015年 同大学院修了
- 2024年 「再生 ～西鉄バスジャック事件からの編み直しの物語～」出版  
被害者としてや子育て・人権について全国各地で講演活動

参加お申込み

参加をご希望される方は、事前にお申込みが必要です。

インターネットから

- ①矯正・保護総合センターホームページ(<https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>)の「講演会等のお申込み・資料請求」ボタンをクリックしてください。
- ②「お申し込みフォーム」の必要事項(名前・住所・メールアドレスなど)を入力し、内容確認後、送信ボタンをクリックしてください。  
登録されたメールアドレスに受付完了メールを返信いたします。

FAXから

以下の参加申込書に必要事項をご記入の上、送信してください。

お問い合わせ

龍谷大学 矯正・保護総合センター

TEL:075-645-2040 FAX:075-645-2632

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

<https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>

E-mail: [kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp](mailto:kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp)

### 2024年12月14日 第14回矯正・保護ネットワーク講演会参加申込書

フリガナ	当てはまるものに○をしてください。						
お名前	年齢	10代	20代	30代	40代	50代	60代
		70代以上					
ご住所	〒						
電話番号	FAX番号						
メールアドレス	ご所属・ご職業 (差し支えなければ)						



**075-645-2632**



# 研究活動紹介

## 團藤プロジェクトの研究活動について

**[概要]** 團藤文庫とは、東京大学教授や最高裁判事など数々の要職を歴任した團藤重光博士(1913-2012)が、戦前期から今世紀にかけて自ら収集したコレクションのことです。これらの資料は、当センターの前身である矯正・保護研究センターの設立をきっかけに本学が受贈したもので、生前の團藤博士のご意思に基づきながら段階的に移管作業をすすめ、現在ではその全てが、当センター(本学深草学舎至心館地下1階)に所蔵されています。

本プロジェクトは、この團藤文庫の整理と研究・教育への活用を両輪に活動してきました。プロジェクトメンバーとして、刑事法学のみならず、法史学、法社会学、憲法学、アーカイブズ学など多種多様な領域の研究者約20名が、学内外から参画しています。

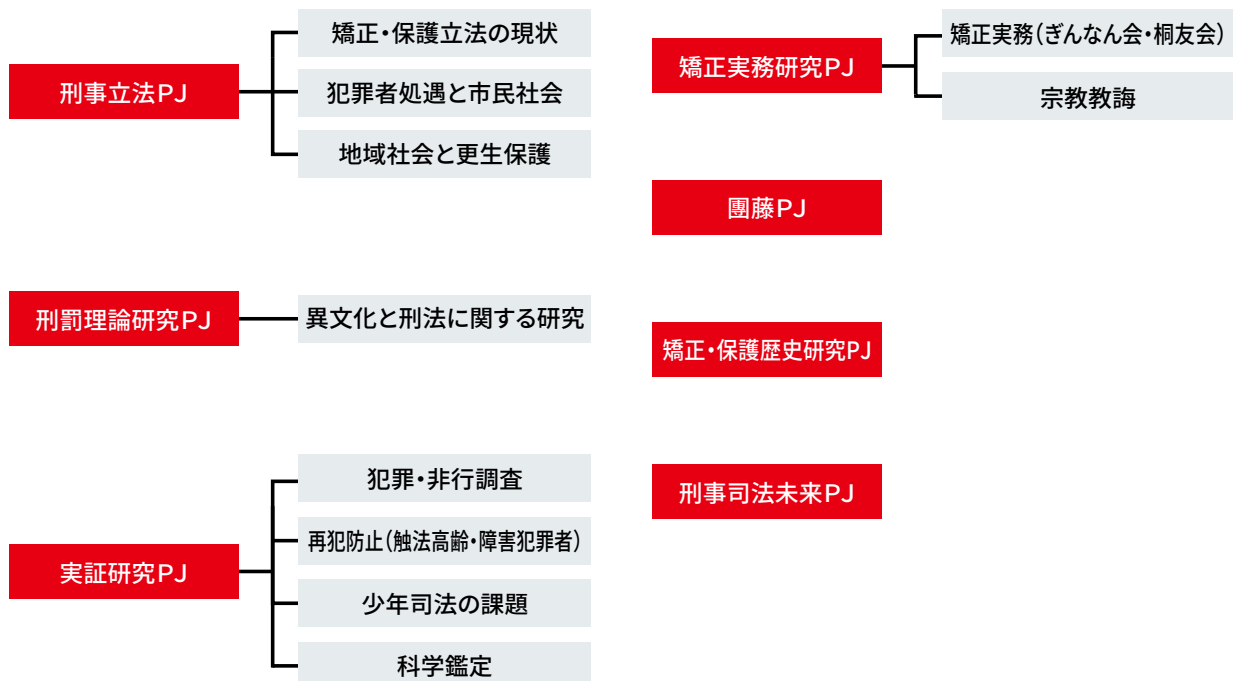
**[活動状況]** (1) 整理事業: 文庫の全体把握、各種資料の分類・整理、劣化資料への対処方法の検討などの基礎的な作業を踏まえ、新たな整理事業を2020年度より開始しました。計画は2020年からの8カ年を「初期調査(1期・1年)」、「目録作成(2期・6年で優先度が高いもの31,000点)」、「公開・活用の準備(3期・1年)」と段階ごとに振り分け、丸善雄松堂株式会社に作業を委託して進めています。8年目を以降の3期には、團藤文庫の本学図書館への移管が予定されており、現在、資料の公開方法や公開基準について検討を重ねています。(2) 研究活動: 年に複数回の研究会を継続して開催している他に、学内外の研究費助成に積極的に申請し採択実績を積みあげています(例えばJSPS科研費 16K03273, 19K01255, 23K01068)。これまでの主な研

究成果として、当センターの『研究年報第6号(團藤文庫を用いた研究の可能性)』(2017年)、『研究年報第13号(團藤重光研究の新たな展開)』(2024年)に、それぞれ特集を組んで掲載しました。また、福島至(編/著)『團藤重光研究—法思想・立法論、最高裁判事時代』(日本評論社、2020年)、石塚伸一(編/著)『刑事司法記録の保存と閲覧—記録公開の歴史的・学術的・社会的意義』(日本評論社、2023年)と2冊の書籍を刊行し、更に今年度は團藤博士の最高裁判事時代の日記を翻刻した書籍の刊行を予定しています。(3) 特記事項: 團藤文庫は、多分野にわたる内容を有するばかりでなく、團藤博士が活躍された時代に関する歴史資料としての価値も持っています。センター内部の研究に用いるばかりでなく、広く公開することや教育にも役立つべきであると考えています。NHKとの共同研究の結果、新たに発見された事実から作成されたNHK ETV特集「誰のための司法か～團藤重光 最高裁・事件ノート～」(初回放送日: 2023年4月15日)は、学内外で大きな反響を得ました。また関連イベントとして、『生誕110周年記念特別展・團藤重光の世界—法学者・最高裁判事・宮内庁参与(2023年5月22日～6月4日)』を本学で開催し、300名を超える方々にご来場いただきました。本プロジェクトの活動内容については、例えばデジタル化した資料をアーカイブズとしてアップするなど、さまざまなコンテンツを当センターのHPで公開しています。ぜひ一度ご覧くださいませ。

團藤プロジェクト代表

畠山 亮(龍谷大学法学部教授)

## 2024年度 矯正・保護総合センター研究プロジェクト



## 新刊情報

### 『龍谷大学矯正・保護 総合センター 研究年報 第13号 2023年』

[編集発行者]  
龍谷大学矯正・保護総合センター  
[発行所]  
株式会社現代人文社  
[発行日]  
2024年2月16日発行



ISBN978-4-87798-851-7

### 『矯正講座 第43号 (2023年)』

[発行者]  
龍谷大学矯正・保護課程委員会  
[編集者]  
『矯正講座』編集委員会  
[発売所]  
株式会社成文堂  
[発行日]  
2024年3月18日発行



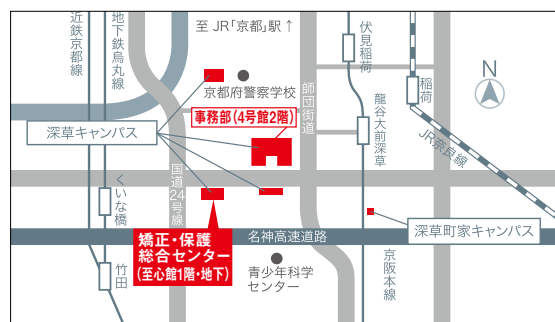
ISBN978-4-7923-3437-6

### 『日本の青少年の行動と意識 国際自己申告非行調査 (ISR D)の分析結果』

[編者]  
ISR D-JAPAN実行委員会  
[発行人]  
成澤壽信  
[発行所]  
株式会社現代人文社  
[発売所]  
株式会社大学図書  
[発行日]  
2024年3月21日発行



ISBN978-4-87798-853-1



### 龍谷大学 矯正・保護総合センター

- 京阪「龍谷大前深草駅」下車徒歩約8分
- JR奈良線「稲荷駅」下車徒歩約13分
- 京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋駅」下車徒歩約5分

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67  
Tel.075-645-2040 Fax.075-645-2632  
URL <https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>  
E-mail [kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp](mailto:kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp)